

2021年9月17日

2021年度9月大学院学位授与式 教職員代表祝辞

理工学研究科 足立修一

ご紹介いただきました理工学研究科の足立です。

教職員代表としてこのようなご挨拶をする機会を与えていただいたことに感謝いたします。私は、いまご挨拶された伊藤公平塾長と同じ理工学部 物理情報工学科に所属しています。今日は、矢上キャンパスではなく、三田キャンパスで伊藤さんと同じ場所において、そして伊藤さんの後にご挨拶すること、とても不思議な感じですが。事前に伊藤さんは英語でスピーチされると聞いていたので、私は日本語でお話しさせていただきます。

さて、みなさん、学位取得、誠におめでとうございます！

みなさんに慶應義塾大学から学位記が授与されたこと、大変うれしく思います。

私はいまから35年前の1986年3月に、この三田キャンパスで開かれた学位授与式に出席しました。私の名前が「あだち」なので、あいうえお順でたまたま工学研究科の代表になり、当時の石川忠雄塾長から壇上で「工学博士」の学位記を受けることができました。大変懐かしい思い出です。いまと違って、当時の写真が残っていないことが残念です。

学位取得後は、民間企業である東芝総合研究所に4年間勤め、その後、地方国立大学である宇都宮大学で16年間過ごしました。2003年には当時の文部省在外研究員として、英国のケンブリッジ大学に滞在し、素晴らしい環境の中で研究に専念することができました。そして、学位取得してちょうど20年後の2006年の4月に、ご縁があって、慶應義塾大学の理工学部の教員になり、矢上キャンパスに戻ってきました。そのため、私は慶大教員としては15年のキャリアしかない新参者です。

国内外のいろいろな機関に所属することによって、それぞれの文化の違いを肌で感じてきました。行く先々で、研究仲間、そして、研究以外の友人がたくさんできました。特に、自分の研究分野以外の人との交流の重要性は、ケンブリッジ大学のコレッジ生活で学びました。自分が動くことによって世界がどんどん狭くなっていき、それと同時に、交友関係が広がっていきました。この人脈は、私にとって大きな財産です。

このような私の個人的な経験をもとに、今日は二つのことをみなさんにお話ししたいと思います。

一つ目は、特に、博士号を取得された方へのメッセージです。

博士号を取得されたほとんどの人は、この後、慶應以外の場所で教員あるいは研究者として、研究活動を続けていくことになるでしょう。先ほどお話ししたように、私もそうでした。慶應とは違う環境に身を置いたときに、まず、私が感じたことは、

「慶應ってかなり特殊な環境、あるいは普通ではない環境だったんだなあ、
そして慶應って素晴らしいところだったんだなあ」

ということでした。教授陣、研究仲間、研究費、奨学金など、研究に関する環境は日本でもトップクラスでしょう。先日、JST 次世代研究者挑戦的研究プロジェクトが採択され、博士課程学生への手厚い経済的支援がさらに充実しました。そして、事務方のサポートが非常に手厚く、親切、すなわちフレンドリーなのです。慶應にいるみなさんにとっては当たり前のことですが、これはちょっとすごいことなのです。詳しくは言いませんが、国立大学には、国立大学独特のよい伝統と、悪い伝統があります。すべての大学や研究機関が慶應のようであるかという、決してそうではなく、慶應は、いい意味で、かなり特殊な環境だと思ってよいでしょう。

ご卒業後に、みなさんがこれから新しい環境で研究を始めるとき、慶應を基準として考えずに、新たな環境に適応できるように努力してほしいと願っています。「慶應ではこうだったのに」というのは禁句です。慶應に限らず、自分の母校を理想形として引きずることなく、新しい環境で自分自身の力で新しい道を切り開いてください。そして、国内外のいろいろな場所で、さまざまな経験をしてください。特に、自分の専門分野以外の人との交流を大切にしてください。

みなさんが私のように年を取ったとき、それまでに築き上げた「人脈」は、みなさんにとって大きな財産になるでしょう。

二つ目は、大学院を修了されるみなさん全員へのメッセージです。

先日、ある技術系企業の会長さんとお話しする機会がありました。そのとき、私の高校の先輩である彼は、

これまでの企業では、特定の優秀な従業員に仕事を任せ、その人ばかりが忙しくなっていくことが多かったのですが、これからはこのようなモデルは通用しませんね、その人に転職されたら企業は困ってしまいますし、job security の観点からも好ましくありませんね

とおっしゃっていました。このように、一人のスーパースターがすべてをやっていくという時代は終わりを告げていくでしょう。そして、チームで行うプロジェクト型の仕事や研究がますます増えていくでしょう。

慶應を卒業されるみなさんには、その道で一流の研究者そして社会人になっていただきたい。研究プロジェクトなどのリーダーになってほしいと、私は願っています。そして、みなさんはそのような立場に就かなければいけない人たちです。

リーダーになるためには、研究能力だけでなく、コミュニケーション能力や語学力、幅広い教養、そして相手のことを考える「気配り」などのような「人間力」、言い換えると「人間的な魅力」が必要です。慶應の教員の私が言うのはおかしいですが、慶應の学生はそのような素地を十分にもっていると思います。その素地を今後発展できるかどうかはみなさん次第です。

しかし、リーダーになると、自分一人で研究や仕事をするときと比べて、さまざまな困難が立ち上がるでしょう。たとえば、リーダーになると、個性豊かな、言い換えると、「クセが強い」研究者という人間をまとめなければなりません。そのときの「極意」をひとつ、今日は伝授しましょう。これは、35年来の私の友人から教えてもらった話です。

西岡常一（つねかず）さんという法隆寺専属の宮大工の棟梁、すなわちリーダーがいらっしゃいました。彼は薬師寺金堂再建も手がけたそうです。この西岡さんが、個性豊かな、プライドの高い職人たちをどのようにして、まとめるのかについて語った言葉をつぎに引用します。

その人はそれでちゃんとした職人ですし、性根（性格）というものは直せるものやないんですわ。やっぱり包含（ほうがん）して、その人なりの場所に入れて、働いてもらうんですな。曲がったものは曲がったなりに、曲がったものが合うところに、はめ込んで

やらんと、あかんですな

すいません。神奈川県出身なので、関西弁のアクセントはまねできませんでした。

プロジェクトリーダーは、チームのメンバー（大学のPIであれば、メンバーは学生でしょう）に、このように動いてほしいとか、このようになってほしいと強制してしまいがちです。しかし、20歳を超えた大人の性根（性格）をそう簡単に変えることはできません。リーダーの思ったようにメンバーは動いてくれないかもしれません。

リーダーがメンバーを制御、あるいは管理するのではなく、リーダーは、メンバーが最も活躍できるような場面を見つけてあげて、ジグソーパズルのピースのように、そこにはめ込んであげることが大事だということを、西岡さんは言っています。

私は、自動車や人工衛星などといった人工物を思い通り操る「システム制御工学」を専門としています。しかし、人間という対象は、制御工学という学問では到底立ち向かうことができない相手であると、つねづね思っています。人間をアクティブに制御しようとせずに、相手と調和して知らぬ間に操ることができればと、思っています。

早い人は、学位取得後すぐに研究室のリーダー、すなわち、PIになるかもしれませんが、何十年後にリーダーになる方もいるでしょう。そのときまで、この話をおぼえていてくれると私はうれしいです。

これで二番目のお話は終わりです。

最後に、学位記を授与されたことはみなさんにとってゴールではなく、ようやく研究生生活のスタートラインに立つことができたということを強調しておきます。

しかし、一つだけ確かなことは、みなさんの前には素晴らしい未来が開けているということです。みなさんがどのような道を進んでいかれるのか、私はワクワクしています。

今日は、本当におめでとうございました。

Congratulations on your graduation.

Thank you very much.